目次

一、はじめに

二、小説の内容と振り返り

1.作品の紹介

2.キャラクターの紹介

3.振り返り

三、感想

一、はじめに

高校時代に、中国の作家・劉慈欣による SF 小説『三体』に出会う。この作品は、私を SF の世界へと導き、未来の世界を描く内容に強く惹かれる。現実世界の未来がどのような姿になるのか、そして本当に強大な異星文明が存在するのかと、しばしば想像するようになる。

私が本作『外来者』を執筆する動機は、現在の地球が温室効果の影響を受け、まるで自滅へと進んでいるかのように見えることにある。

小説の中では、ジェームズ・ラブロックの提唱する「ガイア仮説」を参考にし、架空の「地球意識」という存在を創作する。地球そのものを擬人化し、もし地球が絶え間ない侵害を受け続けるならば、人間のように抗議の意志を示すのではないかと考える。もしそうであるならば、人類は文明の継続のために、新たな道を模索せざるを得ない。

世界観を構築し始めた当初、明確な終着点があるわけではなかった。出発点はただ一つ、「もし地球に意識があるとすれば、それは人類をどう捉えるのか？」という素朴な問いである。

主人公・浩正が初めて地球の核心からのメッセージを受け取る場面を執筆する際、筆者の内心には言い表しがたい衝撃が走る。それは異星人でもなければ神でもなく、我々が今立っているこの惑星自身が発する救難信号であり、警告である。この設定は単なる空想的な SF ではなく、現実社会への批判的視座と問題意識の表れである。本作を通じて、読者が未知なるものを探究するとともに、徐々に崩れゆく我々の身近な世界にも目を向けることを願ってやまない。

二、作品の内容と振り返り

1.作品の紹介

物語の舞台は、現在から 20 年後の未来である。その時代、アメリカは重力波技術の突破に成功し、この技術を用いて宇宙における天体の運動状況を観測するとともに、異星文明からのメッセージを受信することを目指す。しかし、予想に反し、人類が受信するのは宇宙からの信号ではなく、地下 5000 キロメートルから発せられるものであった。そのメッセージの発信源は地球そのものであり、その内容は「人類は地球を離れよ」というものである。

主人公である相澤浩正は、東京大学に勤める地質学の教授である。長年研究に従事してきた彼であるが、次第に限界を感じ始める。そうした折、彼のもとに国際連合からの招待状が届く。そこには、世界各国の専門家によって構成される「文明連合理事会」への出席要請が記されている。この会議の目的は、人類が受け取るメッセージの真相を解明することであり、浩正の人生はここから大きく動き出すこととなる。

浩正はニューヨークにて文明連合理事会へ参加するが、その場でかつての恋人・梨香と再会する。だが彼女の正体は、地球が人類へメッセージを伝えるために派遣する使者「ガビ」である。その後、浩正はガビと手を組み、人類と地球の真実、そしてその起源を解き明かすための旅へと踏み出す。

本作において筆者は、未来社会における様々な科学技術の発展を仮定し、物語世界に導入している。たとえば、スマート AR メガネや無人タクシーといった日常生活に密着するテクノロジーのほか、『三体』に登場する核融合エンジンや無推進剤推進装置といった高度な宇宙技術も応用している。また、地球からのメッセージを伝える「使者」の正体についても、仮想的なバイオニック構造を持つ高性能アンドロイドとして詳細な設定を施している。

中でも、本作において最も大胆な仮説が、人類の起源に関するものである。筆者は人類起源を、従来の進化論とは一線を画す「星間移民説」として再構築した。この仮説によれば、現代人類の祖先は約六万年前、星間戦争の影響によって別の恒星系から地球へと移住してきた星間難民であったとされる。

これらの移民たちは、地球到達後に二つの系統に分裂する。一つは地表に定住した「地表派」、もう一つは地中深くに潜伏した「地底派」。地表派こそが我々の認識する現代人類。地底派は長らく地球内部に独自の文明を築いてきた「地底文明」の担い手である。

しかし地表世界は、これまで幾度となく文明崩壊レベルの災厄に見舞われ、そのたびに再建と忘却を繰り返してきた。その結果、地表人類は地底文明の存在を完全に忘却するに至った。

そして現代において、地底文明は自身の存在が暴かれることによって両者間の大規模な衝突が発生することを危惧し、地表人類に対して「地球意識」を偽装する形で退去を促すメッセージを発信する。これは、双方の人類を守るために選ばれた唯一の手段である。

物語の中で、私は第四章において「人類は害虫である」という考えを述べる。人類は

他の場所から地球にやって来て、環境を破壊し、その後また新たな居住地へと移動しようとする。この発想こそが、本作のタイトルを『外来者』とした理由である。

しかし、害虫が必ずしも悪であるとは限らないと私は考える。それは立場の違いにすぎない。環境という視点から見れば、人類は確かに存在してはならないものである。しかし人類自身の視点から見ればどうか。我々はただ生き延びようとし、種を存続させたいだけである。

害虫も同じである。自分たちの群れのために行動するだけであり、それは人類と何ら変わらない。

このように、世の中には絶対的な正しさや誤りというものは存在しない。すべては立場によって異なる。私はそう考える。

2.キャラクターの紹介

相澤浩正

彼は東京大学地質学科の教授であり、幼い頃から天文学者である父の影響を受けて、宇宙や地球の真実に強い好奇心を抱く。地球の起源を研究するために、地質学者の道を選ぶ。

彼は教育と研究の両面で優れた成果を挙げる。中でも最も有名なのは、2041 年に発表した「プレート境界エネルギーの変換可能性に関する理論的研究」である。

学生に対してあまり多くを語らないが、授業内容は論理的で精密であり、多くの学生や同僚から尊敬を集める。それにもかかわらず、彼は次第に自分自身に「学術的疲労」を感じるようになり、純粋な理論研究に空虚さを覚える。この職業上の行き詰まりが、彼の物語序盤における心理的背景となり、国際連合から届いた謎の招待状に強い興味を持つきっかけとなる。

物語の初期において、浩正は「科学至上主義」の立場を貫き、地球意識や地底文明といった超常的な現象には懐疑的な態度を取る。しかし、彼自身が重力波の異常、会議の機密、そして 2 人の「使者」と接触することで、従来の科学的枠組みを超えた一つの衝撃的な真実を受け入れざるを得なくなる。それは、地球が単なる無機物ではなく、主観的意志を持つ「存在」であるというものである。

加えて、かつての恋人であり地球の使者でもあるガビとの再会は、彼に強い感情的な衝撃を与える。それを契機に、彼は「理性」や「データ」だけで世界を理解するのではなく、人間性、選択、記憶といった「感情の層」も含めて、地球と人類の運命を捉えようとする。

彼の変化は、人類が純粋な理性から、感情と倫理的思考を統合する必要性を象徴するものである。浩正という人物は、地質学者という立場にとどまらず、知識と信念の間で葛藤する人類文明そのものの姿を象徴する存在である。

彼の探求の旅は、「真実が常識に反する時、それでもなお我々はそれを追い求める勇気を持てるのか」という問いを投げかける。そして彼は、ガビという存在を通して、「人間とは何か」という問いに新たな理解を得る。

ガビ

ガビは本作において極めて重要な役割を果たすキャラクターである。彼女の正体は、地底文明によって製造され、地球意識の命を受けて地上に派遣された人型の使者である。外見は 25 歳前後の東洋系の女性に見えるが、実際には高度な知能と自己意識を備えたバイオノイドであり、再生能力や高度な演算処理、感情模擬システムを搭載する。

彼女はかつて「梨香」という名前で東京大学法学部の学生として人間社会に潜入し、6 年にわたって生活する。その期間、主人公の相澤浩正と交際し、深い関係を築く。しかし彼女の本当の任務を迎えると、彼女は何の説明もなく姿を消し、浩正の心に長く残る疑問を残すことになる。

数年後、ニューヨークで開催される文明連合理事会の場で、浩正は再び彼女と再会し、彼女の真の姿「ガビ」としての存在を知ることになる。地球意識の代理者として、彼女は地上人類にメッセージを伝え、地球からの退去を促す任務を担う。しかし長期間にわたって人間社会に関わる中で、ガビは次第に自律的な感情や倫理的な葛藤を抱くようになり、地球の命令に盲従しなくなる。

彼女の心理的な変化は、本作における重要なテーマの一つ、「人工知能は真の感情と自由意志を持ち得るか」という問いを体現するものである。物語後半において、彼女は浩正と手を取り合い、人類の起源に関する真実を追求し、自らの存在意義そのものに挑むことを選ぶ。

彼女は使者の中で、感性の側を象徴する存在である。

マイケル

マイケルは、ガビと同様に地底文明によって創造された使者であり、非常に高い再生能力と演算処理能力を備える。

物語の後半において、彼は地底文明により制御されるようになり、主人公の浩正と二人きりで対話を行う。その中で、彼は人類の起源、地底文明と地上文明の分裂の歴史、そして「地球意識」を偽装した本当の目的を明らかにし、物語における真実の解明を導く重要な存在となる。

彼は使者の中で、理性の側を象徴する存在である。

辻孝太郎

孝太郎は、浩正の東京大学研究室における同僚であり、地震波異常の共同観測者でもある。彼の性格は比較的理性的かつ保守的であり、「学術界の主流的視点」を代表する存在として描かれる。

地球意識や地底空洞説といった非伝統的な仮説に対して、彼は浩正が従来の科学的手法から逸脱することに反対し、学問的原則から離れないようにと忠告する。

彼の役割は、「理性な現代科学」を象徴するものである。人類がこれまでの常識を覆される状況に直面する中で、孝太郎は懐疑的立場をとる一方で、最終的には浩正が真理を追求し続けるための「逆方向からの支え」という機能がある。

3.振り返り

幼い頃から文章を書くことが得意ではなく、作文もいつもひどい出来であった。そのため、この作品は私にとって非常に大きな挑戦である。しかし、大学三年生の時に笹沼先生の「総合日語三」を履修し、文章を書く機会を得ることができたことで、私は改めて「書く」という力の重要性を真剣に考えるようになった。

私は元々文章表現が得意ではないため、『外来者』の執筆においてもしばしば劉慈欣の文章スタイルや世界観構築を参考にしている。結果として、本作は次第に『三体』に似た雰囲気を持つようになっていった。それは私の欠点ではないかと思う。

その後、台湾の小説家・李洛克のコラムで書いた**「初めての創作は往々にして模倣から始まる」多くの人々は、心から物語に引き込まれた作品と出会い、その物語が終わっ**

た後もなお心がそこから離れられず、筆を執ってその世界を自らの手で延長しようとする。特に学生作家においてこの傾向は顕著であるという。という趣旨の文章を読んだことがあった。

これは私自身の状況とも非常に近い。私が SF 小説を書くきっかけとなったのは、まさに劉慈欣の作品であった。だからこそ、私は自分の作品に『三体』への情熱を込めたのである。

私が少しずつ「書く」ということにおいて成長してきた証なのではないかと、そう思っている。

三、感想

『外来者』は、SF とサスペンスを融合させた作品であり、架空の重力波事件、地球意識、地底文明、人類起源の仮説を通して、「私たちは何者か」「私たちはどこへ向かうのか」という深い命題を描こうとする物語である。物語は未来の世界を舞台に構築されているが、そのすべての設定や衝突は、現代社会において人類が直面している環境危機、文明の矛盾、そして倫理的選択に呼応している。

本作は多くの設定において『三体』から着想を得ているものの、執筆の過程で私は徐々に自分自身の語りの論理とスタイルを確立し、登場人物や世界観の積み重ねを通じて、人類の未来に対する想像の第一歩を形にすることができた。

私にとって、文章を書くことは決して容易なことではない。しかし『外来者』という創作の旅路を経て、私はぼんやりとした発想を具体的な言葉に変える方法を学び、何度も修正と試行錯誤を重ねる中で、自分だけの視点を見つけることができた。

もし読者がこの作品を読む中で、地球について、人類について、そして自分自身について、少しでも深く考えるきっかけを得ることができたならば、この物語には、それだけで十分な価値と意味があると私は信じている。

参考文獻

『三體』三部曲

https://zh.wikipedia.org/zh-tw/%E4%B8%89%E4%BD%93_(%E5%B0%8F%E8%AF%B4)

【寫作教學】完整寫作訓練４循環（2）練習寫

https://www.rocknovels.com/write.html